DOI 10.18995/24344710.13.85

研究ノート

明治中期から昭和初期の弘前における演説・討論活動

東奥義塾関連資料を中心に

菅家知洋・師岡淳也

Speech and debate in Hirosaki from the mid-Meiji period to the early Showa period

Archival research of Toogijuku documents

KANKE Tomohiro, MOROOKA Junya

Abstract

This essay explores the nature of speech and debate activities in Toogijuku and Hirosaki during the mid-Meiji to the early Showa periods. To this end it examines three student/alumni bulletins preserved in the Hirosaki Municipal Library and the Toogijuku Library. By tracing the history of speech and debate activities over a span of approximately 50 years with particular emphasis on the activities of Toogijuku's literary society and oratory club, the essay offers an overview of how such activities evolved both in and outside of the school. It ends with suggestions for future research.

1. はじめに

東奥義塾（現在の東奥義塾中学校･高等学校）は津軽（弘前）藩の藩校稽古館の流れを汲み、明治 5 年 11 月に菊池九郎、兼松成言、成田五十穂、吉川泰次郎を中心に設立された私立学校である。菊池、成田、吉川が学んだ慶應義塾にちなんで命名された同塾は、洋学教育に力を入れるなど、西洋文化を積極的に受容していた。また、東奥義塾は「地域社会に対して新しい知識、文化、思想等を流入するという機能」（新谷、1978、p.11）も担っており、津軽地方における洋学および西洋文化の伝播に大きく貢献している（北原、2002）。そうした＜啓蒙的＞役割を果たす上で、演説と討論は、新聞･雑誌と並ぶ主要メディアであった。明治 10 年 10 月に東奥義塾内に文学社会を組織し、「毎土曜日に集会して、講談、文章朗読、論説、討論、の四科を講習する [1]」（本多、1878、pp. 24-25）ことにしたのも、塾生達の言論術を鍛えるだけでなく、作文や弁論を通して地域社会に塾内で学んだ「知識、文化、思想等」を広く伝えることを狙っていたと考えられる。そこで、本研究ノートでは、東奥義塾学友同窓の機関誌である『学友通

信』『塾友』『学友会誌』の関連記事を紹介しながら、明治中期から昭和初期までの塾内および弘前市内における演説･討論活動の広がりを概観していく。

2.明治期から昭和初期の学校における演説・討論活動

明治期の学校における演説･討論活動に関する研究はいくつかの系統に分けられる。一つ目は、慶應義塾における演説・討論の研究である。福澤諭吉が『学問のすゝめ』や『会議弁』で演説を奨励したことや慶應義塾の有志とともに明治 7 年（1874）6 月に三田演説会を創設し、演説や討論を実践していたことはよく知られている。『三田演説会資料』（松崎、1991）は、『三田演説日記』や『記事課弁論控』など三田演説会の活動記録をまとめ、解説を加えた資料集である。また、三田演説会とは別に、慶應義塾の生徒達も明治 9 年末より協議社、猶興社、精干社といった演説、討論グループを相次いで結成し、それぞれ独自の活動を展開していた（松崎、1998）。

二つ目は、キリスト教学校における演説・討論活動に関する研究である。明治初期より次々と設立されたキリスト教学校の多くは、米国の大学のカリキュラムに倣って、作文や演説などの言論術の訓練を教育課程に組み込んでいた。特筆すべきは文学会（literary society）の存在で、明治学院の英和文学会（菊田、1970）や同志社の興風会（上野、1979）などの文学会の記録から、正課外の活動として生徒が演説や討論を定期的に行っていたことが明らかになっている。さらに、青年会など、文学会以外の課外活動団体で演説会が開かれることもあった（e.g. 関西学院キリスト教主義教育研究室、1976）。

三つ目は、札幌農学校や東奥義塾のように、初期のカリキュラムが米国のリベラルアーツ教育の影響を色濃く受けた学校における研究である。両校とも正式にはキリスト教主義に立った学校ではないが、札幌農学校では明治 9 年（1876）に、東奥義塾では明治 10 年（1877）に文学会が設けられ、生徒が暗唱、朗読、作文、演説、討論を実践する場となっていた。札幌農学校の文学会である開識社については、明治 9 年から 14 年（1881）までの会務記録が現存し、『北大百年史』にも所収されている（「開識社記録（一）」、1981）。また、札幌農学校では同時期に Elocution, Declamation, Extempore Debate などの科目も設置されていた（赤石、2016, 2017；外山、1992；松沢、2005）。東奥義塾については、北原（2002）が東奥義塾、インディアナ･アズベリー大学（現在のデポー大学）、ウェズリアン大学関連の資料などを丹念に読み解きながら、東奥義塾でどのように洋学が受容され、それがどのような影響を地域社会にもたらしたのかを考察している。

四つ目が､草創期の東京外国語学校や東京大学における演説･討論活動に関する研究である。小野（1997）は、東京外国語学校の学生有志らによる演説・討論団体（金蘭会および血合会）の明治 13 年（1880）9 月から明治 15 年（1882）末までの活動を記録した『有終記』を紹介している。一方、菅原（2019）は、東京開成学校および東京大学法理文三学部で明治 10 年 3 月より学術演説会が開催され、それが大学と社会とをつなぐ回路としての役割を果たしていたと論じている。

最後に挙げられるのが、私立法律学校における討論会に関する研究である。荒川（2023）によると、「明治期のいわゆる私立法律学校を起源とする大学の学校史・大学史では、各校での討論会のほか、学校の枠を越えて行われていた私立法律学校聯合討論会が取り上げられることが多い」（p.99）。とりわけ明治 14 年より学術研究や親睦を目的に始まった「五大法律学校」―専修学校（現専修大学）、東京法学校（現法政大学）、明治法律学校（現明治大学）、東京専門学校（現早稲田大学）、英吉利法律学校（現中央大学）―による連合討論会は大きな社会的反響を呼んだこともあり、複数の研究が存在する（例えば、早稲田大学大学史編集所、1978；専修大学、2013；瀬戸口、2016）。明治中期は私立法律学校連合討論会の他、東京大学法律研究会を前身とする法学協会の主催による討論会の筆記録も出版されていたが、荒川（2023）は、これらの討論筆記の分析を通して、民法学習の方法としての討論会のあり方を詳述している。

明治後期から昭和初期については、高等学校の弁論部に関する研究がある。例えば、井上（2001）は、自由民権運動の高揚期における演説の流行との比較で、「明治三〇年代から学校の弁論部を中心に展開した」演説熱の高まりを「第二次弁論ブーム」（p.87）と名付け、その担い手である「雄弁青年」が析出する過程を記述すると共に、明治 32~35 年度（1899-1902）、明治 44 年～大正 3 年度（1911-1914）、大正 14～昭和 2 年度（1925-1927）の三期に分けて、弁論ブームの盛衰を辿っている。また、『第三高等学校弁論部部史』（安藤、1935）、『中央大学辞達学会史』（中央大学辞達学会史編纂委員会、1978）、『慶應義塾弁論部百三十年史』（慶應義塾大学弁論部・エルゴー会百三十年史編集委員会、2008）のように、各校の弁論部や雄弁会の歴史をまとめた部史も刊行されている。第二次弁論ブームを後押ししたのは、明治 43 年（1910）に大日本雄弁会（現在の講談社）が創刊した雑誌『雄弁』（1910-1941）だが、熊谷（2018）は、昭和 8 年（1933）から約 1 年半にわたって連載された『雄弁』誌上の大学対抗討論会を中心に、昭和戦前期におけるディベートの受容のされ方を分析している。

以上の先行研究を踏まえ、明治中期から昭和初期までの弘前における演説･討論活動に注目することの意義を述べて、本節を締めくくることにしたい。北原（2002）が指摘するように、演説を含む西洋文化は中央から地方に一様に広がった訳ではなく、地域によってその受容の仕方が異なる。また、演説･討論活動を促進したり、逆に抑制する要因は複合的であり、例えば、東奥義塾では、慶應義塾出身の教師の赴任、宣教師によるキリスト教の伝道、外国人教師の招聘、自由民権運動の高まりといった要因が絡み合いながら、学内外で演説、討論が盛んに行われるようになった。さらに、『学友通信』第 13 号（1889）で東京における演説会の盛況ぶりを「演説の面白からぬ割合に毎度聴衆場に満ちて殆んど尺寸の余地を残さざるはワイワイ連の多き証拠ならんや[2]」（p.14）と揶揄するなど、東奥義塾関係者にとって東京の演説会は必ずしも模倣の対象だった訳ではない。北原（2002）は、東奥義塾や津軽地方における洋学の受容過程を辿ることに主眼を置いているため、演説会の内容や形式など、演説･討論活動の実態については詳細に論じておらず、研究対象期間も明治 5 年の東奥義塾設立から津軽家による補助金が打ち切られた明治 16 年が中心である。しかし、北原（2002）も記しているように、「東奥義塾の「文学社会」はその後［明治 10 年代以降］長く命脈を保」（p.115）ち、明治期を通して断続的に活動が続いている。また、大正期に東奥義塾が再興された後は弁論部が組織され、塾生達は

遠方で開催される弁論大会にも参加するようになった。さらに、明治 20 年代には弘前市内で私立産業会員による演説会や婦人大演説会が開かれるなど、演説会の担い手や目的も多様化している。そこで、本研究ノートは、明治 21 年から約半世紀にわたって断続的に発行されていた東奥義塾の同人誌会報中の関連記事を参照しながら、当時の弘前における演説･討論活動の一端を描き出すことを目指す。

3. 東奥義塾関連資料

本研究では明治中期から昭和初期にかけて東奥義塾学内で発行された『学友通信』、『塾友』、『学友会誌』の三つの雑誌を調査した。いずれの雑誌も東奥義塾の教員や学生による記事や文学作品などを掲載しているほか、教育内容や学校行事、そして課外活動の様子を伝えており、当時の学生、保護者、教職員、同窓生など、学校関係者にそれらを伝えていたと考えられる。例えば、学友通信会規則には「本会は東奥義塾同窓学友の通信を旨として旧来の交義を保持し併せて知識交換を諜るものとす」（1888、『学友通信』第 1 号、pp.3-4）とあり、学友同窓間の通信が目的の一つとして明記されている。

本研究は上記の三雑誌について東奥義塾図書館と弘前市立図書館にてアーカイブ調査した。下記の調査対象と欠号は両館の所蔵状況にもとづいている。『学友通信』は明治 20 年代前半に発行された第 1 号（明治 21 年（1888）4 月）から 40 号（明治 25 年（1892）2 月）までの欠号（10~12、15~16、18~19、25、27、30、35、37 号）を除く 28 冊、『塾友』は第 1 号（明治 35 年（1902）8 月）から 10 号目にあたる終刊記念号（明治 44 年（1911）3 月）までの 10 冊、そして『学友会誌』の第 1 号（昭和 2 年（1927））から第 11 号（昭和 12 年（1937））までの欠号（6、8、10 号）を除く 8 冊を調査対象とした。『学友通信』は、明治 21 年に創刊された月刊誌で、明治 25 年に発行された第 40 号をもって廃刊となった。廃刊理由は不明だが、東奥義塾は、明治 16 年に津軽家からの資金援助が打ち切られた後、慢性的な財政難に苦しみ、明治 18 年と 22 年に全焼した校舎の再建費用の捻出や日清戦争による物価高騰の影響も加わり、明治 20 年代後半には職員の給与支払いにも苦慮するようになる（伊藤、1958、pp.249-250）。さらに、度重なる塾長･副塾長の交替や職員の大量辞職（「解説」、2002、pp.95−96）などで、学校運営にも支障をきたし、機関誌を発行する余裕もなかったのではないか。また、『学友通信』最終号（第 40 号）には、「文学会の隆盛を企図」して「規則を改正し組織を一変」（p.13）したことが報じられており、同誌が廃刊になる頃には文学会の活動も低調だったと推測される。

結局、東奥義塾は財政難を理由に明治 34 年（1901）より市立に組織変更され、名称も弘前市立中学東奥義塾に変更された（明治 43 年（1910）からは県立に移管）。『塾友』は公立学校時代に発行された機関誌であり、未発行の年や、二号発行された年があるなど、刊行頻度に多少のばらつきがあるが、おおよそ年に一冊のペースで発行されていた。その後、東奥義塾は明治 43 年に生徒募集を停止し、大正 2 年（1913）に一旦廃校となったが、大正 11 年（1922）に私立学校として再興している。『学友会誌』は再興後の東奥義塾の機関誌であり、年に一回のペースで刊行されていた。

今回調査した三雑誌は、二度の空白期間はあるものの、明治 20 年代から昭和 10 年代のおよそ 50 年間の大半の期間の東奥義塾の教育活動の形跡をたどる資料となりうると考えられる。これら東奥義塾の雑誌は時代の流れの中で創刊と廃刊を繰り返しているが、財政難の中、雑誌の名称を変えながら再興を繰り返していることが、当時の関係者が雑誌の発刊に重要な意義を見出していたことの現れと言えるかもしれない。例えば、昭和 2 年（1927）発行の『学友会誌』創刊号の「編纂後記」には、雑誌創刊には資金面の困難がともなったが、「東奥日報の特別なる御親切で、どうかこうか出来たんです」（p.208）と述べられている。また、昭和 12 年（1937）発行の第 11 号の「編纂後記」においても、予算不足のため「止むを得ず下級生の原稿を大部分没にしなければなりませんでした」と下級生原稿の非掲載の理由を説明し、「下級生諸君はどうか来年の十五周年記念号を目指して筆を揮ってください」（p.78）と次年号への投稿を呼びかけているが、著者の調べたかぎりでは、『学友会誌』の第 12 号以降が発刊された記録は見つからなかった。

4. 資料から読み取れる演説・討論活動

『学友通信』、『塾友』、『学友会誌』の三つの雑誌に記載されている演説・討論活動は主に演説筆記、文学会活動報告、式典や歓送迎会、米国や東京の近況報告、弘前における演説会の開催報告、正課科目としての英語討論に大別される。

演説筆記は明治 20 年代前半に刊行されていた『学友通信』に多く掲載されている。これらは主に教育者や著名人による演説を筆記したものであり、演説の内容は学生への教育的・教訓的なものが中心となっている。『学友通信』に載っている演説筆記をみると、西洋の知識を積極的に取り入れようとする当時の東奥義塾の意向が現れているように思われる。例えば、『学友通信』第 3 号（1888）には「コーレル氏演説筆記」（pp.29-39）が掲載されており、そこでは塾生に対し激励の言葉が述べられ、社会に役立つ人材となるため、広く学問分野を学ぶことが肝要であるといった内容で塾生を鼓舞している。また、明治 21 年（1888）9 月に行われた、新任の英語教師ジョン・ワイアーによる演説「教員及生徒諸君に告く」には欧米の学問を取り入れることは日本の学校の利益となるが、それは日本人が劣るということではなく、西洋人や日本人にかかわらず適材適所に活躍の場があるなどと述べられている（『学友通信』第 6 号、p.38）。また、東奥義塾の再興に貢献し、塾長をつとめた本多庸一の演説筆記は第 1 号（1888、pp.30-37）、第 26 号（1890、pp.21-24）、第 27 号（1890、pp.23-26）、第 28 号（1890、pp.21-23）などの複数号にわたり掲載されている。本多は弘前出身で、明治 7 年（1874） 11 月に東奥義塾の塾頭に就いている（その後、第 2 代塾長となる）（氣賀、2012、p. 2）。明治 15 年 （1882） には青森県会議員となり、その後、議長も務めるなど、地元の有力者でもあった（堀江、2023、pp. 38-39）。明治 21 年（1888）9 月から「宗教教育の視察」を目的に渡米生活を送り、明治 23 年（1890）6 月に帰国後は、東京英和学校総理（明治 24 年より青山学院院長）に就任している（明治 25 年（1892）5 月から明治 29 年（1896）6 月までは東奥義塾塾長も兼務）（氣賀、2012；東奥義塾百年史編纂委員会、1972、pp. 23-24）。興味深いのは上述の『学友通信』第 26 号から

第 28 号かけて掲載された「本多庸一君談話東奥義塾同窓会に於て」である。同記事は、本多庸一が米国留学から帰国後、明治 23 年（1890）8 月 13 日に開かれた「東奥義塾同窓懇親会兼本多庸一氏招待会」にて行われた「一時間に渉れる」演説の筆記であり、彼の米国留学の様子がくわしく語られている（1890、『学友通信』第 26 号、p. 9）。ここにも東奥義塾の洋学受容への意識が見てとれる。

文学会活動報告の記事では、文学会が主催する演説会で行われた演説や討論について記載されている。記事によって分量や内容が異なり、演説を行った人物が記されているだけの時もあれば、より詳しく演説の題名や討論の論題が記載されていたり、聴衆の反応などの会場の様子が描写されている記事もある。文学会による演説会の目的は「学生弁論を講するの奨励」と「市中の人々に学術の価値あり知識の貴重なるを悟らしむる」（1888、『学友通信』第 8 号、p.64）ことにあった。明治 21 年（1888）11 月第 4 土曜日の定例会後に、教員の成田哲四郎が演説会を一般公開することを発案し、全会一致で承認されている（『学友通信』第 8 号、p.63）が、これは後者の目的を念頭においた決議と言えるだろう。実際に、それ以降の演説会は、明治 22 年（1889）10 月に焼失した東奥義塾校舎が再築されるまでは、弘前市内の芝居小屋である柾木座で開催されている。演説会には「如何ならんかとの好事心より来聴せしものも多」く（1888、『学友通信』第 9 号、p. 37）、「聴衆は無慮二千余人にして場内立錐の余地なし」（1890、『学友通信』第 24 号、p. 20）と報じられるなど、かなりの盛況だったようである。その一方で開催費用の捻出には苦労していたようで、東奥義塾教職員が新年会の開催を取りやめて、その費用を演説会の開催費に充てることもあった（1889、『学友通信』第 9 号、pp.38-39）。

当時の演説会の開始時刻は午後 6 時または 7 時で、所要時間は 3 時間ほどであった。会によって多少の違いはあるが、開会の挨拶と式順序の説明に続き、東奥義塾生による講談、討論、論説が行われ、同じく塾生による批評で終わる点は共通している。明治 11 年発行の『東奥義塾一覧』には、文学会（当時の名称は文学社会）の活動として、講談、文章朗読、論説、討論の四科（本多、1878、pp. 24-25）が挙げられているが、明治 20 年代前半の文学会では文章朗読が割愛されることも多かった。また。北原（2002）は、卒業生の回想や（東奥義塾の文学会と似た組織である）インディアナ･アズベリー大学の文学会の資料に基づき、講談をデクラメーション（古今の著名な文章の暗唱）、論説をオレーション（演説）と対応させている（p.103）が、『学友通信』の報告記事から講談と論説の違いを判断することは難しい。以下、参考までに明治 21 年（1888）12 月と明治 23 年（1890）5 年に開催された文学会のプログラムを表 1-2 にまとめた。後者は臨時講習会と呼ばれているが、英語教師として新たに着任したジョン・ワイアーによる講習を除いて、会の構成は基本的に同じである。

表 1　文学会演説会（明治 21 年 12 月 15 日開催）

講談	福士徳太郎	注意力の必要
講談	杉山保五郎	三大力の活動
討論	主張者：齋藤栄	女学校を設くると貧学校を

	抗論者：対馬良之助 （陪審：杉山三百造、中川良太郎）	設くると方今孰れか急務なるや
論説	橋本石松	富貴の書生と貧賤の書生
論説	阿部柾吉	社会進歩の原因
講習	ジョン・ワイアー（通訳：西舘庸一郎）	文学論
批評	不明	

出典：『学友通信』第 9 号、pp.36-37

表 2　文学会臨時講習会（明治 23 年 5 月 17 日開催）

講談	角田三郎	修身自国非二途論
講談	工藤陽太郎	日本社会と日本青年
討論	主張者：黒瀧外三郎 抗論者：川村虎之助 （陪審：福士徳太郎、木村元三郎）	処世の法情実と道理と孰れか最も必要なるや
論説	村上碓次郎	国学拡張せざるべからざるを論ず。
論説	木村直次郎	戦国時代
批評	前小屋泰吉	

出典：『学友通信』第 24 号、pp.20-21

討論では特定の論題を巡って主張者と抗論者が議論を交わしているが、発言回数や制限時間など進行方法への言及はない。論題は毎回異なるが、弘前女学校開校直前の明治 21 年（1888）末に女学校の設立の是非について討論が行われるなど、来場者の関心を意識してか、時機に適った地元の話題が選ばれることもあった。判定を下す陪審は塾生 2 名が務めているが、上記の演説会ではいずれも陪審の判定が割れ、最終的に会長が勝敗を決めている。『学友通信』で報じられているその他 2 回の文学会演説会においても、陪審の判定が一致せず、会長が最終的な判断を下している。文学会の会長は教師が務めており、立場に配慮して、討論の勝敗を会長に一任するのが慣例だったのかもしれない。

調査をした『塾友』は明治 35 年（1902）から明治 44 年（1911）の廃刊までの間の文学会の活動の概要を伝えている。ほぼ毎号に「演説会」、「文学会」、「講演会」と多少の活動名称の変化がみられるが、聴衆を集めた会の様子が報告されている。これらの会は年に複数回開催されることもあり、多いときは 300 名以上の聴衆を集めるなど盛会であったようだ。例えば、明治 38 年 5 月開催の第 1 回文学会には 315 名の参加があり、同年第 3 回文学会では 208 名の聴衆が集まった（1906、『塾友』第 6 号、pp.50-52）。この年は特に文学会が盛況であったようで、年に 3 大会が開催されており、『塾友』が伝える中でも多く会が開催された年である。『塾友』

の発刊期間は前述の「第二次弁論ブーム」の期間とも重なるため、東奥義塾もそういった学校における弁論ブームの影響下にあったと言えそうだ。

この時期の文学会は「本塾体操場」にて行われ、会により多少のばらつきはあるが、午後 1 時頃から午後 3 時頃、長いときは午後 5 時頃まで続いたと報告されている。会の進行は、開会の挨拶にはじまり、前半は「朗読」で後半に「演説」がそれぞれ数席ずつ行われ、それらについて教員による批評がされた後、閉会となるのが典型的なものであった。これらの演題に加えて、「討論」が行われた会があったことが報告されている。例えば、明治 36 年（1903）の第 5 回文学会では、朗読は行われず、4 席の演説のあとに、「創業と守成と孰れか難き」という討論会がおこなわれ、討論の結果「守成の難き」側が「大多数を以て勝利を得たり」と報告されている（1904、『塾友』第 4 号、p.73）。この討論は 3 人対 3 人で行われたようで、それぞれの立場の参加者名が記載されている。また、会によっては前もって予定された演題終了後に、「臨時講演」や「臨時演説」に移り、そこでは追加の朗読や演説が行われたようだ（1906、『塾友』第 6 号、pp.50-52）。例えば、明治 38 年（1905）7 月に開催された第 2 回文学会では、「右終りて石戸谷熊一君臨時演説として塾友会に付いでの感慨を雄弁を以て述ぶ次て大澤理作君現今本塾に他不良学生の入学を許す其の弊害一般塾生に及ぼさんことを憤慨せられたり次ぎに櫻庭先生は『武士道と現今青年の弊風』という演題四十分計り有益なる講演をせられたり」（1906、『塾友』第 6 号、p.51）と報告されているように、文学会に参加した学生や教員は自由に発言する機会をあたえられ、積極的に登壇し聴衆の前で弁を振るっていたようである。このように「臨時」の発言を受け入れていた当時の文学会はより開かれた自由な雰囲気の中に行われていたことが推測される。

昭和 2 年（1927）に創刊された『学友会誌』には『塾友』に報告されている明治後期に開催されていた「文学会」という名称での活動は記載されておらず、その代わりに弁論部 [4] の活動報告が各号に記載されている。昭和初期の弁論部の活動の特徴としてあげられるのは、東奥義塾の弁論部員が学外各地で開催された弁論大会に積極的に参加していた点である。例えば、昭和 2 年の活動報告として 9 月 24 日に開催された「盛岡高等農林弁論部主催第一回東北中等学校生徒弁論大会」に東奥義塾より 1 名派遣したとし、「之を以て当弁論部汽車遠征の嚆矢となす」と報告されているように、比較的遠方で開催された弁論大会へも鉄道を利用して積極的に参加している（1928、『学友会誌』第 2 号、p.158）。このような学外弁論大会への参加はその後も『学友会誌』各号に頻繁に報告されており、当時各校の弁論部の間で盛んに交流が行われていた様子がうかがえる。また、東奥義塾弁論部開催の弁論大会にも他校から弁士が参加している。合計 15 名の弁士の参加があった、昭和 3 年（1928）12 月 1 日に行われた「上級生弁論大会」では「県下各学校へ招待状を出」し「弘中［弘前中学校］」と「弘工［青森県立工業高校］」から弁士の参加があったとし、「他校弁士諸君の参加を得た此の大会は、本年度の下級生大会以上に大なる収穫があった」と大会の盛況を評している（1929、『学友会誌』第 3 号、p.197）。さらに昭和 11 年（1936）の活動報告では、「仙台東北学院高等部主催の北日本中等学校雄弁大会が同校に開催」され、「出演弁士三十有余名に及ぶ」中で東奥義塾から参加した学生が「強敵を下して優勝」し、その結果について「飛電母校に達して歓声天地にとどろく」と伝えている

（1937、『学友会誌』第 11 号、p.5）。この弁論大会は権威のある大会であったようだが、そこで優勝する当時の東奥義塾弁論部のレベルの高さが読み取れる。また、同じ月の報告に「同月二十七日、仙台ラジオ放送局より放送の光栄に浴せりその日の演題『逆境に生きる我等の覚悟』」とある（1937、『学友会誌』第 11 号、p.5）。確定はできないが、大会優勝の弁論か、または別の東奥義塾生による弁論がラジオ放送されたようである。

このような弁論大会は、弁論に競技的な側面を持たせている。弁論大会に参加し、そこで活躍するために、東奥義塾弁論部は学内で顧問の指導のもと、定期的な弁論練習を行っていた。例えば、『学友会誌』第 2 号（1928）には「来るべき弁論大会に吐露すべき力強き宝を蓄へ、準備として毎週土曜日生徒会を利用し顧問指導の下に、練習弁論例会を開らかんとす」（p.160）と記されており、さらに「塾内弁論大会」を「下級生徒（一、二、三年）弁論大会」（p.158）と「上級生徒弁論大会」（p.159）に分けて開催するなど、段階的な弁論上達への仕組みが作られていた。また、弁論の審査には、例えば、前述の塾内弁論大会では「満点百点中、内容五十点態度音声各二十五点として審査」（p.158）とあるように、数値的な基準が採用されていたようだ。この審査基準の点数配分は弁論大会によって変わることもあったようだ。例えば、翌年の塾内「上級生弁論大会」では「内容四十、態度三十、音声三十に採点法決定す」と点数配分の変更が報告されている（1929、『学友会誌』第 3 号、p.197）。この変更は弁論内容より弁論の伝え方をより重視する変更であり、その理由について興味深いが、他の弁論大会、例えば昭和 7 年（1932）6 月開催の「全校生徒弁論大会」では「満点三百点（内容百点。態度百点。音声百点）」と配点されているなど、各弁論大会の方針や意義に従い点数配分が決められていたと考えてよさそうだ（1933、『学友会誌』第 7 号、p.330）。

今回調査対象とした三誌には東奥義塾における式典や歓送迎会などの様子を伝える記事が掲載されているが、そのような記事には往々にして演説が行われた様子が記述されている。このような特別な行事では学校外から著名人などを招き、登壇を依頼していたこともあった。例えば、明治 21 年の『学友通信』第 4 号（1888）の「卒業證書授與式」（pp.54-58）の報告記事では、「マクインターフ氏の兼ねて定めたる東奥義塾出身の紳士に頼み置きたる演説を始め弘前病院長医学士伊東重氏日本の進歩なる一題を論し農学士木村繁四郎氏教育論なる問題を説き風琴奏し終わり」（p.56）とされているように、依頼をうけた複数の卒業生がさまざまなテーマについて演説を行っている。

東奥義塾の雑誌のうち特に『学友通信』は米国や東京の近況を伝える記事をいくつか掲載している。地方都市弘前にある東奥義塾が東京の動向に注目することはごく自然に思われるが、それに加え米国の状況にも目が向けられている点が、明治 10 年（1877）に津軽地方初の海外留学生を米国へ送り出している東奥義塾（北原、2002）の特徴の一つともいえる。そのなかで、特に米国の演説や討論の状況を伝えている記事は注目に値する。例えば、『学友通信』第 4 号（1888）には「米國綠城通信」（pp.14-20）と題した、インディアナ州グリーンキャッスルのデポー大学へ留学中の高杉榮二郎は、その年の大統領選の政談演説のなかで「主義を主張し或は反駁すること故其体裁は余程日本国の形勢より進歩致居る様考へられ候」（pp.14-15）と伝え、米国での活発な演説や討論活動を称賛している。

また、前節で触れたように、『学友通信』には弘前において開催された諸々の演説会の報告記事が載っている。これらは、基督教大演説会、仏教演説会、農談演説会、産業演説会、婦人大演説会といった演説会名で記されており、明治 20 年代はじめにこのような様々なテーマをかかげた演説会が弘前にて開催されていたことがうかがえる。さらに、私立青森衛生会や私立陸奥教育会における「談話演説討論」の取り組みを伝えるなど、青森県下における演説・討論活動の動向も幅広く報じている（1888、『学友通信』第 5 号、pp.67-68）。報告記事の内容や分量はさまざまだが、例えば明治 22 年（1889）5 月 26 日と 27 日両日に開催された「佛教演説會」（1889、『学友通信』第 13 号、pp.23-24）については、複数の演説の概要とその評価、そして聴衆の反応の様子など、演説会の様子が比較的詳細に記されている。明治 23 年（1882 年）2 月 5 日に長野県から室賀追を弁士として招いて開催された婦人大演説会に対する講評は、「聴衆者も多からず余り好評を博せぬ」（1890、『学友通信』第 21 号、p.8）と手厳しい。当時流行していた「神道大演舌会漢学眞教大演説会仏教大演舌会」についても、「其要点を知り得るに苦しむ議論」「聴衆の喝采を博せんとして却て満場の失笑を催す事も多かる」（1888、『学友通信』第 7 号、p.55）と酷評している。実際の演説の出来映えについては知るよしもないが、当時の東奥義塾が洋学を積極的に教育に取り入れ、キリスト教布教の拠点となっていた（北原、2002）ことも、こうした厳しい評価の一因かもしれない。『塾友』と『学友会誌』には同様の演説会報告の記載は特にみあたらない。

三雑誌には東奥義塾の英語教育に関する記事がいくつかみられるが、特に英語による討論や演説の教育が重視されていたことを示す記事は注目に値する。『学友通信』第 38 号（1891）の「英語討論」という記事では「当塾本科三年二年の両級に英語討論なる一科を設け毎週一時間生徒をして自由に討論談合せしめ以て其の不正なるところを匡正」するとし、これが「語学練修の最上策」（p.15）と評している。ただし、実際の討論の内容や生徒の反応など授業の詳細については触れられていない。また、『塾友』第 8 号（1908）の「講演部記事」（pp.53-54）には講演会の式次に英語対話、英語朗読とともに、英語演説も行われたと記録されている。

最後に三つの雑誌を通時的に調査した結果、本研究のテーマの一つである「演説」の呼称に変化が見られた点を指摘しておきたい。今後より詳細な分析が必要となるが、演説を意味する「弁論」や「雄弁」に使われる「弁」という表現が、明治時代の終わり頃からより頻繁に使われ始めている。例えば、『塾友』第 5 号（1905）には「弁士」（p.5）、「弁を操り返さんや」「勇弁」（p.61）ということばが使われ、同様に『塾友』第 6 号（1906）では、「雄弁」（p.51）、そして『塾友』第 9 号（1906）では「弁士」「雄弁」（p.54）がみられる。「演説」や「演舌」という言葉も並行して使われ続けているが、この「弁」ということばが積極的に使われ始めた背景には、前述した「第二次弁論ブーム」があると推測される。また、それまで演説や討論活動は主に「文学会」の活動として報告されているが、昭和 2 年発刊の『学友会誌』第 1 号（1927）では「雄弁部」の活動報告（pp.158-159）が記載されており、その後、第 2 号（1928）では「弁論部」と名称が変わり、それ以降、昭和 12 年の第 11 号（1937）まで「弁論部」の活動報告として、「弁論大会」の様子などが掲載されている。

5. 東奥義塾が担った地域の演説・討論活動

前節で述べたとおり、東奥義塾の文学会演説会は「市中の人々に学術の価値あり智識の貴重なると悟らしむる」ことを目的の一つとしていた。その一環として、演説会を一般公開した他、東奥義塾関係者が市内で開かれた集会に参加し、演説や討論を行うこともあった。その一例が、交親会における討論ある。交親会は、地元の青年達が「商事工事に関する要件を討究する」ことを目的に結成された会だが、『学友通信』第 2 号（1888）は「会員芹川蒲田氏の両氏も其会員に加はり」（p.35）定例会に参加したと伝えている。『東奥義塾再興十年史』に載っている職員一覧（笹森、1931、p.43）によると、両名は東奥義塾教員の芹川得一と蒲田廣のことであろう。北原（2002）や新谷（1978）によると、東奥義塾教員を中心に結成された結社共同会は青森県の自由民権運動の中核をなしていたが、明治 20 年代に入っても地域の団体や集会に参加し、そこで演説や討論をすることもあったようだ。

さらに、『学友通信』第 20 号には、明治 22 年（1889）末に東奥義塾生徒 5 名が西･北津軽郡を巡行し、各地で演説会を開催した記録も残っている（詳細については、表 3 の巡行記を参照）。塾生一行は 12 月 17 日に弘前を出発し、同日夕刻からの板屋野木村（現板柳町）での演説会を皮切りに、12 月 30 日までの約 2 週間に 8 町村で演説会を開催し、それぞれ 70 名～300 名ほどの聴衆が来場している。30 日に岩崎村で最後の演説をした後、同地では演説会が珍しいという理由から、弘前に戻ることを決め、同行者の実家のある驫木村で年を越した後、1 月 3 日に弘前に到着している。

表 3　西･北津軽郡における演説会の記録

日時	場所	備考
（明治 22 年）12 月 17 日	板屋野木村（龍淵寺）	聴衆 70 名。佐藤象一（尋常小学校教師）と面会。
12 月 19 日	五所川原村（鶴喜方）	聴衆およそ 200 余名。同地同窓の尽力を得て開催。
12 月 20 日	金木（雲祥寺）	聴衆 200 余名、警察 2 名臨席。「同村福士高橋等の諸氏に準備及広告の事を依頼し置きたる」。
12 月 22 日	木造村（尋常小学校）	聽衆「場内殆んど立錐の地なし」。同窓の尽力を得て開催。
12 月 24 日	鰺ヶ沢（新町座）	聴衆の少なさ（約 20 名）に失望して、開催を見合わせる。当地の有志家と同窓の尽力を得る。
12 月 25 日	金ヶ沢（淨安寺）	聴衆 100 余名。当地同窓の尽力を得て開催。
12 月 26 日	鰺ヶ沢（劇場）	聴衆凡そ 300 余名、警察 1 名臨席。
12 月 29 日	深浦村（三國屋宅）	聴衆 100 名程。同窓の尽力を得て開催。
12 月 30 日	岩崎村（大屋貴忠宅）	聴衆 70 余名。七戸藤之助氏及び同窓の尽力を得て開催。

出典：『学友通信』第 20 号、pp.13-15

訪問先では同窓生や地元有志家の協力を得ており、一行に加えて、彼らが演説をすることもあった。開催場所は寺院や小学校が多く、ときには個人の住居を借りることもあった。弘前のように大規模な集会に適した会場が訪問地にはなかったのだろう。

また、西･北津軽郡巡行とほぼ同時期に、別の生徒 2 名に工藤儀助塾長が随行して、北秋田･鹿角の両郡への演説旅行を敢行している（表 4）。

表 4　北秋田･鹿角郡における演説会の記録

日にち	場所	備考
12 月 18 日	扇田村（高等小学校）	聴衆 100 余名。青年会幹事等の周旋により開催。
12 月 21 日	十二処町（尋常小学校）	聴衆 40 余名。青年会幹事等の周旋により開催。
12 月 23 日	花輪町（青年会会場）	聴衆 130 余名。青年会幹事等の周旋により開催。
12 月 24 日	毛馬内町（佐藤某宅）	聴衆 30 余名。「同町西村源五郎岩泉源藏諸氏の周旋」。
12 月 26 日	小坂鉱山（鉱山倶楽部）	聴衆 120~130 名。

出典：『学友通信』第 20 号、pp.15-16

こちらは聴衆が 30 余名～130 名程度と弘前と比べて少ない。各地の演説会では地方における教育振興の重要性を説き、私立学校の価値を訴えると共に、2 ヶ月前に全焼した東奥義塾校舎の再築への支援を呼びかけている。上記の演説旅行には、校舎再建のための寄付を呼びかける狙いがあったのかもしれない。もっとも、「到所聴衆の静まり返りて聴き居たるは此等の地には演説抔の珍しきにも因る」（p.16）と書かれているように、北秋田･鹿角郡では演説会の開催が一般的ではなく、期待したほどの成果は得られなかったのではないか。このように、北東北地方に限っても、明治中期の演説･討論の受容のされ方には大きな地域差があったのである。

6. おわりに

本稿は明治中期から昭和初期にかけて東奥義塾内で発行された『学友通信』、『塾友』、『学友会誌』のアーカイブ調査をもとに、当時の弘前における演説、討論活動の諸相を探ろうとした。三誌に記録されているおよそ 50 年間に及ぶ、東奥義塾の正課科目や課外活動、特に文学会から弁論部における演説・討論活動の軌跡を通時的に追うことにより、それぞれの時代背景の中でどのような演説・討論活動が弘前において行われてきたかを概観することができた。

本研究のように、特定の地域における演説・討論活動を一定の期間にわたって調査することは、二つの理由で重要である。一つ目は、演説や討論のあり方は地域によって異なるからである。前述の通り、津軽地方の中でも演説や討論の受容のされ方には地域差があった。また、北原（2002）が明らかにしたように、慶応義塾の影響を受けて演説が普及した秋田と比較して、

東奥義塾では米国の大学の文学会の影響を受けて、かなり早い時期に演説･討論が盛んに行われていた（p.115）。今後、様々な地域における演説･討論の歴史研究が進むことで、その地域に特徴的な演説・討論活動を明らかにしつつ、地域間の関連性を含めた複合的な観点から演説・討論の諸相を明らかにすることができると考えられる。二つ目の理由は、演説･討論のあり方は地域だけでなく時期によっても大きく異なるからである。本稿では、自由民権運動が沈静化した明治 20 年代以降も、東奥義塾の正課科目として英語討論が教えられたり、弘前における演説会の主催者が多様化するなど、演説や討論が様々な形で実施されていたことを示した。さらに、大正期に入ると東奥義塾における演説･討論の活動拠点が文学会から弁論部に移ったことも明らかになった。本稿は研究ノートという位置づけであり、三つの雑誌における演説･討論関連記事の紹介に留まったが、今後は『開文雑誌』『東奥』『東奥文学』といった他の機関誌や『東奥日報』などの地元紙に調査対象を広げることで、東奥義塾および弘前における演説･討論活動の実態をより多角的に調べることにしたい。

註

[1] 読みやすさを考慮し、カタカナをひらがなに、旧字体を新字体に改めた。

[2] 本稿では『学友通信』『塾友』『学友会誌』の三雑誌からの引用に関しては出典を雑誌名と号数で統一する。

[3] 明治 23 年 12 月に文学会が再開した際は、学内の体操場にて会合を開いている（『学友通信』第 29 号、p. 13）。

[4] 『学友会誌』第 1 号では雄弁部という名称で報告され、それ以降は弁論部という名称になっている。

引用文献

赤石恵一（2016）「札幌農学校の elocution：米国の系譜から」『日本英語教育史研究』第 31 号、55-77.

赤石恵一（2017）「札幌農学校開識社の系譜：Massachusetts Agricultural College における文学会規則との比較」『英学史研究』50 号、25-42.

荒川英央（2023）『明治中期の民法教育・民法学習―法学徒たちの社会史へ―』信山社.

安藤勝一郎（編）（1935）『第三高等学校弁論部部史』第三高等学校弁論部.

伊藤徳一（1958）『東奥日報と明治時代』東奥日報社.

井上義和（2001）「文学青年と雄弁青年―「明治四〇年代」からの知識青年論再検討―」『ソシオロジ』45 巻 3 号、85-101.

上野直蔵（編）（1979）『同志社百年史　資料編 1』同志社.

小野修三（1997）「東京外国語学校の学生有志の演説・討論団体の記録―『有終記』のなかの明治十三年から十五年」『近代日本研究』第 14 巻、113-142.

「開識社記録（一）」（1981）北海道大学（編）『北大百年史：札幌農学校史料（二）』（pp. 626-686）ぎょうせい.

「解説…東奥義塾沿革関連資料」（2002）東奥義塾･東奥義塾協賛会（編）『―資料で見る―東奥義塾の歴

史　開学 130 年記念』(pp. 104-106) 東奥義塾.
関西学院キリスト教主義教育研究室（編）(1976)『関西學院青年會記録』関西学院キリスト教主義教育研究室.
菊田貞雄（1970)「英和文学会に顕われたる明治学院風景（築地より白金へ)」井深梶之助とその時代刊行委員会（編)『井深梶之助とその時代　第 2 巻』(pp. 80-101) 明治学院.
北原かな子（2002)『洋学受容と地方の近代―津軽東奥義塾を中心に―』岩田書院.
熊谷芳郎（2018)『一九三三年の大学対抗ディベート―彼らは何を目指したのか―』渓水社.
慶應義塾大学弁論部・エルゴー会百三十年史編集委員会(編)（2008)『慶應義塾弁論部百三十年史』慶應義塾大学出版会.
氣賀健生（2012)「資料センター所蔵貴重文献の史料」『青山学院資料センターだより』第 6 号、2-3.
笹森順造（編）(1931)『東奥義塾再興十年史』東奥義塾學友會.
新谷恭明（1978)「東奥義塾の研究」『日本の教育史学：教育史学会紀要』21 巻、4-22.
菅原慶子（2019)「東京大学草創期における演説会と市民への学問発信」『高等教育研究』第 22 集、165-184.
瀬戸口龍一（2016)「「五大法律学校」に関する基礎的研究―明治期における私立法律学校の連携の事例として―」『専修大学史紀要』第 8 号、13-46.
専修大学（編）(2013)『専修大学史資料集　第三巻―五大法律学校の時代―』専修大学出版局.
中央大学辞達学会史編纂委員会（編）(1978)『中央大学辞達学会史』中央大学出版部.
東奥義塾百年史編纂委員会（編）(1972)『開学百年記念東奥義塾年表』東奥義塾.
外山敏雄（1992)『札幌農学校と英語教育―英学史研究の視点から―』思文閣出版.
堀江洋文（2023)「旧津軽藩士本多庸一の信仰と思想」『人文科学研究所月報』第 321 号、23-53.
本多庸一（編）(1878)『東奥義塾一覧』.
松崎欣一（編）(1991)『三田演説会資料』慶應義塾福澤研究センター.
松崎欣一（1998)『三田演説会と慶應義塾系演説会』慶應義塾大学出版会.
松沢真子（2005)『札幌農学校の忘れられたさきがけ―リベラル・アーツと実業教育』北海道出版企画センター.
早稲田大学大学史編集所（1978)『早稲田大学百年史第一巻』早稲田大学.